わが国古代における造営技術僧

はじめに

古代、とりわけ七・八世紀においては宮殿・寺院の造営工事が盛んに行われた。これは、律令制定を目前にし、また律令体制を完成させた古代中央政権が国家の多くの面を中国化し、当時としての近代的景観を創り出そうと努めていたからにほかならない。中央政権の本拠地たる平城宮・平城京はもとより、各地の官衙遺跡を見れば、そこには確かに当時の遺構や遺物などに中国に範をとったものが多く見受けられる。ひとくちに造営技術とはいっても、土木関係の基礎工事から建築工事に至るまでには多くのものが混在する。さらに、工事開始に至るまでにも、たとえば設計という重要な技術がある。それらの技術を的確に把握し、駆使し得る術を身につけた官人層がかなりの数で存在したのである。

もとより、それらの造営工事に携わった技術官人たちの中には、高度な技術を身につけて中国大陸や朝鮮半島から渡来した者たちも含まれていたのであるが、わが国から派遣されて彼の地においてそのような技術を学んで帰国し、技術官人として活躍した留学生たちもかなりの数にのぼったであろう。しかし、ここで注目すべきことは、記録によれば僧侶の中にも高度な造営技術を会得し、活躍していた者が見受けられるということである。中国大陸へ派遣された僧侶たちのすべてがそのような技術の修得に努めたわけではなかろうが、きわめて高度な造営技術を修得して帰国した者も見られるのである。たとえば大安寺の造営に深い関わりをもった道慈などは、まず最初にとりあげねばならない僧侶ということができよう。また、海外へ渡ったか否かは別として、それぞれの寺の造営にどの程度関わったかも明確ではないが、東大寺の行基や良弁、岡寺の義渕、観世音寺の満誓や玄昉、池尻尼寺すなわち法起寺の福亮僧正なども造営技術を身につけていた僧侶たちと思われる。

彼らの技術は、古代国家にとって重要な財産であった。したがって、国家に役立つ技術は徹底的に利用された。そして、僧籍にあってはその活動が充分でないと考えられた場合には、還俗させることさえも容赦なく行われた。新羅から帰朝し占術を身につけていた義法は、政府により和銅七年（七一四）三月に還俗させられ大津連意毗

登を名のることになった。[1] 算暦を知り、芸術全般にわたる広い知識をもっていた隆観は大宝三年（七〇三）十月に還俗した。本姓金、名を財というので、朝鮮半島から渡来した者の子孫であろうか。[2]

このように、僧侶たちの高度な知識や技術は、古代国家を発展させる大きな力となったのである。

小稿は、彼らが修得した技術がどのようなものであったのか、そしてそれが発掘調査で検出した遺構や出土遺物にどのように表われているのかという点に注目しながら、造営技術を駆使し、律令体制下で活躍した何人かの僧侶をとりあげて、彼等の残した足跡を追うものである。

一　造営技術僧たち

七・八世紀において、何らかの形で造営事業に関わったと考えられる僧侶を『日本古代人名辞典』[3]に拠って抽出してみたところ、そのような僧侶二十六名をあげることができた（表1）。彼等のすべてが、自身で技術をもっており、自からが指揮して造営工事を推し進めたとは限らない。記録に残る内容からそう判断したにすぎない者も含まれている。

たとえば、天平宝字六年（七六二）正月、近江信楽にあった藤原豊成の邸宅を石山寺へ移築する際に、壊運使となった慶宝・正順・法宣のごときは、建物を寺へ運搬する指揮をとったり事務を担当したにすぎないのかも知れない。しかし、壊運という語からは建物を解体し運搬するという意を読みとることができる。そのような任務を果すには建築構造に習熟していなければならないだろうし、造営技術を体得していたと考えることができよう。

さて、二十六名の僧侶を、それぞれ造営工事に従事していたと考えられる年代の順に並べてみた。造営年次については史料に載せる年のままにしたが、実際とは異なるものがいくつかある。また、行基や実忠のように、長年にわたって多くの工事に関わった者は、最初の工事の時においた。智光と智通については、記録からは八世紀前半代のことと察せられるが、造営年次が具体的に示されていないので末尾においた。二十六名という限られた数ではあるが、その活躍期間が八世紀に入ってからの者が圧倒的に多い。律令体制の確立に伴って、寺院の整備が急がれたことが知られる。霊亀・養老年間に平城京内で元興寺を初めとする官寺の造営が進められたのに相呼応するかのように、僧籍に入った笠朝臣麻呂、すなわち満誓が派遣されて筑紫の官寺観世音寺の造営が本格的に進められるようになったのが、養老七年（七二三）であるところをみても肯じられることである。

七世紀代の僧侶について気がつくのは、恵施、道昭の二名が入唐留学僧、道登が高麗学生という点であり、いずれも中国大陸、朝鮮半島で学んだという点である。法起寺金堂造営に関った福亮については、「法起寺塔露盤銘文」[4]に留学のことを記してはいないが、後述するように渡来人であった可能性が考えられる。七世紀後半代、全国的に寺院の造営工事が盛んに行われるのであるが、記録に残る造営技術をもった僧侶たちが、いずれも留学の経験をもっていることは、律令制度の完成を目指していた時代背景を物語るものといえよう。以下、何人かの僧侶を概観する。

福亮　『聖徳太子伝私記』所載の「法起寺塔露盤銘文」[5]（以下「露

盤銘」と略す）には、福亮は僧正の地位にあり、舒明十年（六三八）に弥勒像を敬造し、金堂を構立したと記すのみである。『日本書紀』[6]（以下『書紀』と略す）『扶桑略記』[7]（以下『略記』と略す）にも福亮という僧侶の名が見える。それらによると、高句麗僧であるとの説（『書紀』）と呉の学生との説（『略記』）があるが、大化元年（六四五）八月に十師に任ぜられ、いつの頃か明瞭でないが僧正に任ぜられている。前者の福亮については「露盤銘」で福亮僧正云々とあるので、金堂構立時にすでに僧正であったようにも受けとられるが、実際は僧正に任ぜられたのがいつであるのか定かではない。「露盤銘」に見えるのが舒明十年（六三八）で、後者の福亮の初出が六四五年で、その差は僅か七年にしかすぎないところから、この両者が同一人である可能性が高いものと考えられる。とすれば、高句麗僧であれ、また呉学生であったとしても、得がたい広い知識、技術をもっていたものと思われる。

道登　出自が明確でないが、高句麗学生[8]と伝える。白雉改元の際に、高句麗での故事を語り、白雉が詳瑞であることを述べているところを見れば[9]、出自が高句麗であることは確実性が高いものと考えられる。大化元年、さきの福亮とともに十師に任ぜられた。翌大化二年、山背の宇治橋を架構し人畜を済度した[10]。

道昭　河内国丹比郡の人で、俗姓は船連である。白雉四年（六五三）五月、学問僧として第三次遣唐使とともに入唐した[11]。この時派遣された僧侶は十一名で道厳、恵施、定恵等も居た。道厳は崇峻元年（五八八）に百済の朝貢使等と来朝し、寺工、瓦工等とともに献ぜられたことが『書紀』に見えている[12]。定恵は藤原鎌足の長子である。入唐後、道昭が玄奘三蔵を師とし禅定を習ったことはよく知られているところである。帰国の年は明らかでないが、唐での学習の期間を考慮すれば、第四次遣唐船で帰国したものと考えられる。そしてその年、すなわち天智元年（六六一）に元興寺（飛鳥寺）の東南隅に禅院を建てた。これは和銅四年（七一一）平城京に移建されと伝える[13]。文武四年（七〇〇）七十二才で物化し、弟子たちによって栗原の地、あるいは粟原の地[14]で火葬された。天下の火葬はここに始まったとされている。

恵施　天武十三年（六八五）に法起寺三重塔を構立したことが、前述の「露盤銘」に記されている。恵施についての初見は『書紀』の白雉四年（六五三）第二回遣唐使とともに、学問僧として派遣されたことを記した条である[15]。恵施が帰国した年は明らかでないが、法起寺三重塔の造営が天武十三年なので、遅くとも第六回として派遣された遣唐使が帰国したと考えられる天智九年（六七〇）には帰国していたことになる。その後、文武二年（六九八）三月に僧正に任ぜられているので、唐で得た学識が朝廷に認められたものであろう。法起寺三重塔の露盤は慶雲三年（七〇六）にあげられているが、塔の造営工事が開始されてから二十年を経過している。僧正としての務めに忙殺されていたのであろうか。

義渕　両親が多年観音に祈願して授かったという出生の奇縁から、天智天皇に請われて幼時から草壁皇子とともに養育された。義渕がいつ頃僧籍に入ったかわからないが、いずれの史料も大宝三年（七〇三）に僧正に任ぜられたことを記し、その年に竜蓋寺を建てたかのように記している[16]。これは、おそらく僧正に任ぜられた年に、義渕の出生から竜蓋寺造営までのことを集約したためにこのような記述になったのであろう。竜蓋寺は岡寺の法号であり、草壁皇子の岡

僧侶名	造営対象	造営年次	備　　考
福　亮	法起寺金堂	舒明10(638)	弥勒像１躯も。呉又は高麗の人か。
道　登	宇　治　橋	大化２(646)	高麗学生
道　昭	元興寺禅院	天智元(662)	入唐学問僧（白雉４～？)。俗姓船連。宇治橋をとも。
恵　施	法起寺塔	天武13(685)	入唐学問僧（白雉４～？)。
義　渕	岡　　寺	大宝３(703)か	俗姓市往氏。
行　基	家原寺他	慶雲元(704)以来	俗姓高志氏。
寺史乙丸	菅　原　寺	養老５(721)	自からの居宅を施入し建つ。
満　誓	観世音寺	養老７(723)	俗姓笠朝臣麻呂、養老５(721) 出家。
道　徳	長　谷　寺	神亀４(727)	俗姓辛矢田部氏。
道　明	長　谷　寺	神亀４(727)	俗姓六人部氏。
道　慈	大　安　寺	天平元(729)	入唐学問僧(大宝元～養老２？)。俗姓額田氏。
良　弁	金　鐘　寺	天平５(733)	
玄　昉	観世音寺	天平17(745)	入唐学問僧（霊亀２～天平７)。俗姓阿刀氏。
思　託	唐招提寺	宝字元(757)	唐僧。鑑真の門人。西大寺八角塔様を作る。
満　願	多度神宮寺	宝字２(758)	
如　法	唐招提寺金堂	宝字３(759)	唐僧。鑑真の門人。
慶　宝	藤原豊成邸	宝字６(762)	石山寺へ移建の壊運使。
正　順	藤原豊成邸	宝字６(762)	石山寺へ移建の壊運使。
法　宣	藤原豊成邸	宝字６(762)	石山寺へ移建の壊運使。
実　忠	西隆寺別院他	宝字８(764)	渡来僧か。
開　成	勝尾寺塔	神護元(765)	光仁天皇皇子。弥勒寺も。
慶　俊	元興寺食堂	宝亀元(770)か	道慈の弟子。
親王禅師	大　仏　殿	宝亀２(771)	副柱構立
賢　璟	多度神宮寺	宝亀11(780)	三重塔。室生寺をとも。平安遷都に際し地を相る。
智　光	極　楽　坊		仙光院も。俗姓鋤田連。
智　通	平城観世音寺		入唐学問僧（斉明４～？)

表１　造営技術僧一覧

宮を寺としたことによって岡寺と呼ばれたとされる。義渕は智鳳・智鸞に法相宗を学んだが、師の両僧ともに入唐学問僧である。とくに智鳳は新羅からの渡来僧であった。義渕の弟子からは、玄昉、行基、隆尊、良弁、道慈など後に高僧と嘔われた僧が輩出している。

行基　古代の僧侶の中で、行基ほど数多くの造営工事を行なった者はいない。単に寺院の建立だけでなく、各地で橋を架し、池溝を穿った。建立した寺院の数はいわゆる四十九院[17]であるが、これ以外にも多くの寺々を建てている。行基はもともと官に入れられない僧、むしろ官によって排斥されていた僧侶であったが、天平十七年(七四五)正月に大僧正に任ぜられた[18]という特殊な経歴をもっている。行基が官に入る契機が紫香楽宮での盧舎那仏造立であったことからすれば、造営分野においてかなり広範囲で高度な技術をもっていたことが察せられる。いわゆる行基四十九院のうち最初に建てられたのは、慶雲元年(七〇四)の家原寺であった。行基の祖は百済王子王爾と伝えられ、俗姓は高志氏である。天智七年(六六八)河内国(後に和泉国)大鳥郡蜂田郷に生まれ、天武十年(六八二)出家し、持統五年(六九一)受戒したと伝えられる。初め、飛鳥寺に入り学習を続けるとともに山林修業を積んでいたようである。しかし、修業よりもむしろ聚落布教に宗教的意義を見出し故郷に帰った[19]。その年が家原寺を建てた慶雲元年であり、以後精力的に寺院の建立を続けていく。そして天平二十一(七四九)年、平安京右京に建てた菅原寺(喜光寺)で卒した。

満誓　俗姓笠朝臣麻呂であり、八世紀初頭地方長官として活躍めざましいものがあった。すなわち、慶雲三年(七〇六)美濃守に任ぜられ、一時離任したが和銅元年(七〇八)再び美濃守に任ぜられた。霊亀二年(七一六)には尾張守を兼ねた。養老三年(七一九)に新設の按察使に任ぜられ、尾張・参河・信濃三国を管した。同四年に右大弁に任ぜられ、同五年元明天皇不予に際して出家した[20]。通常、国司の一国での任期は三〜四年であるのに、笠朝臣麻呂のように長期間美濃守であったような例はめずらしい。律令国家における官人としての治績が著しかったのであろう。難工事であった吉蘇道を通したり、温泉を開発したことが見えるので、土木工事を含んだ造営工事の才にたけていたものと考えられる。そのためか、出家した後の養老七年(七二三)、筑紫観世音寺別当として派遣されたが[21]、これは遅れていた観世音寺建立のためであった。

道慈　『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』[22]をはじめとして『懐風藻』[23]『大安寺碑文』[24]などによって、道慈の実像にかなり迫ることができる。出自は大和添下郡である。幼くして出家したが、きわめて聡明であったため推されて大宝元年(七〇一)に入唐する。在唐十六年とも十七年とも伝えられ、あるいは帰朝の年が養老二年(七一八)とも伝えられる。その間、唐において学んだ内容については知られるところが少なく、経典を渉覧し三論集に精通したこと、唐王朝の宮中で仁王般若経を講ぜしめられた時にとくに優賞されたことが記されている程度である。

帰朝後については、神叡とともに時政をたすけたこと、浄行僧を大安寺に請じて毎年大般若経を転読したこと、大極殿において金光明最勝王経を講じたこと、十代の天皇のために厳導七処九会図像を造り大安寺に施入したこと、愚志一巻を著したことなどが知られている。しかし、史書の多くに大安寺造営のことが記されているので、道慈の大安寺造営への関わりがきわめて深いものであったことが知られる。そのことを強調しているのが『続日本紀』[25](以下『続紀』と略

す）である。『続紀』天平十六年（七四四）十月二日に道慈卒時の記事がある。この記事で注目すべきは、大安寺の造営に関するところである。すなわち、「近頃大安寺を平城に遷し造る。法師に勅して其の事を勾当せしむ。法師尤も工巧に妙にして構作形製皆其の規模を禀く。有る所の匠手服せざるなし。」と記されている。卒時の伝であるので若干の誇張があるにせよ、道慈が大安寺の造営に関わっていたこと、しかもかなり重要な役割を果していたことが推察されるのである。このことは『続紀』以外の史料からも知られるところである。道慈の手になる大安寺が、『続紀』に記すように、寺観がそれまでのものと大きく異っていたことによってとくに強調されているのであろう。

思託　天平勝宝六年（七五四）、鑑真とともに来朝した唐僧である。鑑真が渡日を決意した最初から行動を共にし、数々の難に遭っている。俗姓王氏で、もと開元寺に居り後に天台山に入った。渡日後の天平宝字元年（七五七）十一月、鑑真に備前国の水田百町を賜わった時、鑑真はその田を以て伽藍を建てることを欲した。その時、さらに鑑真に園地一区を賜った。その地は新田部親王の邸宅のあったところである。その際、普照と思託とは、ここを伽藍の地と定めた。こうして建てられたのが唐招提寺である。[26] 神護景雲年間、勅によって西大寺の八角塔様を作った。[27] 塔様は、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』に「金堂様」とあるものなどと同じく、建物の設計図なり雛形のことである。西大寺で八角の塔を建てようとしたことは、『日本霊異記』に載せるところであり、それが果せなかったことは説話として伝えられているが、[28] 昭和三十・三一両年に行われた発掘調査によって、八角形基壇の基礎地形が確認されている。[29]

如法　天平勝宝六年、鑑真とともに来朝した唐僧である。『日本後紀』によれば、ずいぶん高潔な僧侶であったようである。[30] 唐招提寺諸堂のうち、金堂と西北後房を建立したと伝えられる。

慶宝・正順・法宣　天平宝字六年（七六二）正月、近江信楽で「信楽殿」と呼ばれていた藤原豊成の邸宅を石山寺に移建するために、この三名が壊運使になったことが記録に見える。この時運搬した建物は板屋一棟であるが、この後、三名の名前はこの年の十二月まで散見され、引き続いて豊成邸から何棟かの建物を石山寺に運搬している。時には豊成邸が甲賀殿と呼ばれたことがあったようである。これら三名の僧が常に同一史料に見えるわけではないが、法宣については翌天平宝字七年三月の史料にも、壊運使としての任務に従事していることが見えている。[31]

実忠　東大寺の僧侶であるが、その経歴は造営関係が半ばを占めるほどであり、造営に関わった数の上では行基に匹敵する。造営対象のほとんどが東大寺関係のものであるが、西隆寺別院、新薬師寺西野の塔[32]などの造営にも関わっている。これは実忠が天平宝字四年（七六〇）以後、造東大寺司の運営面に関与していたからであろう。実忠がその造営工事を担当した内容を概観すると、新造のもののみならず、修造したものも数多く見受けられる。大仏背面の破損箇所の修理、大仏光背設置のために大仏殿の天井を一丈切上げたことなどをあげることができるが、[33] これらのことは、いかに実忠が造営技術に習熟していたかを物語るものといえる。

賢璟　一時期元興寺の僧であった。鑑真来朝の際、河内国でこれを迎え、東大寺大仏の前で鑑真から受戒した。宝亀十一年（七八〇）、多度神宮寺の三重塔を建立した。[34] 延暦十二年（七九三）正月、山背国

葛野の地の新都予定地を相するために、藤原小黒麻呂等と遣わされた。[35] また、宝亀年間以降に宝生寺を建てたとも伝える。[36]

二　営まれた堂塔

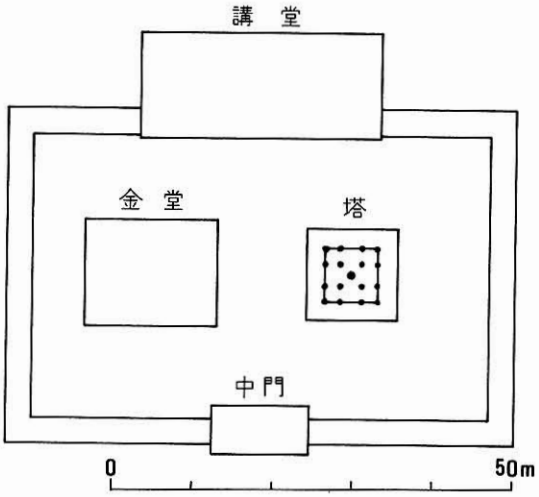
前節で概観した僧侶たちがその造営に関わった堂塔には、何か特記すべき点が見受けられるのであろうか。ここでは、それらの堂塔が営まれた寺のいくつかを概観してみよう。

法起寺　福亮・恵施両僧が造営に関わった法起寺は、奈良県生駒郡斑鳩町岡本に在り、三重塔が残っている。この寺の造営の一端を記す「露盤銘」は左記のとおりである。

上宮太子聖徳皇壬午年二
月廿二日臨崩之時於山代兄王
勅御願旨此山本宮殿宇即
処専為作寺及大倭国田十
二町近江国田卅町至于戊戌年
福亮僧正聖徳皇御分敬造弥勒
像一軀構立金堂至于乙酉
年恵施僧正将竟御願構立
堂塔(宝カ)丙午年三月露盤営作

この銘をもっていた露盤は、天仁・大治年間（一一〇九―二九）に失われてしまい、永保元年（一〇八一）に露盤を降した際に写されたものが『聖徳太子伝私記』に転写されている。したがって読みとりに誤りが見られ、これに対する議論が多く、銘そのものの真偽が問題にされることもあった。現在では、銘が存在したことは否定されていない。[37] 法起寺造営に直接関係することでは、戊戌年すなわち舒明十年（六三八）に金堂が建てられ、これは福亮僧正が建てたとしている。そして、乙酉年すなわち天武十三年（六八五）に堂塔の整備又は塔建立の工事が始まり、慶雲三年（七〇六）に塔の露盤が上げられたこと、この時の工事には恵施僧正が関わったことが記されている。

この銘によると、舒明十年に金堂が建てられ、塔の工事が始められたのが天武十三年であり、仮りに金堂を「構立」したという舒明十年という年を工事開始の年としても、塔の造営が開始されるまで、実に五十年近い歳月を要していることになる。通常の寺院造営過程からは考えにくいほどの長年月である。[38] この五十年近い歳月が、金堂の造営工事が始められながら、その僅か五年後の皇極二年（六四三）に上宮王家が滅亡するという事件が起きたために中断し、再開されたのが天武十三年であると解釈することができる。発掘調査の成果



挿図１　法起寺伽藍配置図　Ｓ１：1000

をみると若干複雑な要素がみうけられる。

法起寺境内において昭和三五・三六年に行われた発掘調査によって、伽藍配置が、金堂を西に、塔を東に置き、両者の中間北方に講堂を置き、回廊が中門から発して講堂両妻にとりつく形であることが確認された。[39] 現存する三重塔は慶雲三年に露盤が上げられた塔そのものであり、昭和四七年から五十年にかけて行われた解体修理によって、かなりの部分が創建当初の状態に戻された。[40] この塔の各層は、法隆寺の五重塔の初層、三層、五層をそのままの規模で写して三層の塔としたものなので、全体の感じが多少ずんぐりしたものとなっている。[41] 基壇は版築で築いており、築成の途中で各礎石を据えている。心礎上面は基壇面にあり、柱座は八角に造り出している。心礎上面が基壇上面にあるものは、斑鳩四か寺では法起寺だけである。金堂跡は塔の西側に想定されているが、法起寺境内の遺構で注目すべきことは、金堂想定遺構や三重塔に先行する遺構が検出されていることである。部分的な調査のため詳細は明らかでないが、七世紀前半代の遺構であり、その遺構の方位は現伽藍の軸線に対して西偏している。[42] このことは、当初営まれた寺がある時期に全面的に方位を変えて建て替えられた可能性を考えさせるものである。

昭和四三年に行われた、寺に西接した地域の発掘調査においても、境内で検出した先行遺構と同じ方位をもつ掘立柱遺構を検出している。それらの遺構の方位は、法隆寺若草伽藍や法隆寺東院下層の斑鳩宮跡の方位に近いものである。[43] 寺が建て替えられる際、その軸線が先行するものと異にする例は他にも見られるところである。[44] 建て替えの時期に、その地域での地割りに変更があり、新たに造営する伽藍の軸線をそれに合わせたためであろう。法起寺の場合考えられることは、舒明十年の「構立」を工事開始の年とすれば、その五年後に上宮王家滅亡という一大事件が起き、造営途次であった金堂の工事は中断の止むなきに至ったということである。その、そもそもの造営工事に携ったのが福亮であったと考えられるのである。おそらく、出自が高句麗あるいは呉と伝えられるように、中国又は朝鮮半島の技術をもって工事を担当したのであろう。そのことが永く記憶されていたために露盤に記録されたものであろう。その後、岡本地域の地割りが改められた時期に法起寺造営工事の続行が決せられ、その工事を担当したのが唐に留学した経験をもつ恵施であった。ちょうどこの頃法隆寺の再建事業が推し進められており、合わせて法輪寺三重塔の建立も行われ、斑鳩全域が整備されている時期であった。このように考えていくと、「露盤銘」の「塔」に関する銘を「宝塔」と解するよりも「堂塔」と読み、法起寺の整備が行われ、次いで「露盤営作」とある慶雲年間に塔の建立があったとする見解に従うべきと考えられる。[45]

建築史の面からは、法隆寺をはじめとする斑鳩地域の堂塔には、中国から朝鮮半島を経てわが国に伝えられた技術を母体とし、朝鮮半島あるいはわが国で形成された建築様式によっていることが認められること、そしてこれは斑鳩地方を中心とした地域的な特色の濃いものである可能性が指摘されている。[46] これらの堂塔の中では法隆寺金堂がもっとも整っており、五重塔以下になるにしたがって次第にくずれを見せる傾向にあるとの指摘は、斑鳩地域での造営工事が急がれていたことを示すものかもしれない。いずれにせよ、法起寺でのみ知られることであるが、中国から帰国した恵施などの技術によって斑鳩地域諸寺院の整備が行われたことが推察できる。

岡寺　義渕創立と伝える岡寺は、その実態がよくわからない。寺跡は奈良県高市郡明日香村岡にあり、現岡寺の建つ丘陵の西端近くに祀られている治田神社一帯がそうであると伝えられている。奈良県教育委員会によって発掘調査が行われたことがあるが、寺跡として明瞭な遺構は検出されなかった。[47] しかし、付近一帯には瓦片が散布しており、この地域に寺が営まれたことは確実視されている。

岡寺の縁起に関しては不明な点が多いが、『略記』[48]と『七大寺年表』[49]に記すところはやや理解しやすい。まず義渕創立になり、草壁皇子の宮を寺としたというところは確かなことであろう。草壁皇子の宮は、史料によって「岡宮」説と「岡本宮」説とがあるが、寺との関係からすれば、岡宮と考えるのが妥当であろう。さらに天平宝字二年（七五八）八月に、草壁皇子が「岡宮御宇天皇」の尊号を追贈されているので、[50] 皇子の宮は岡宮とすべきである。ただ、岡宮の地に寺を営んだという点には若干疑問点がある。飛鳥地域での発掘調査では、宮殿跡と推定される遺構がすでにいくつか検出されているが、それらのいずれもが平坦地にある。そのことからすれば、岡宮の中枢部が先述したような丘陵先端地に営まれたとは考えにくい。むしろ、その一部が丘陵地を含んでいたと考えるべきではなかろうか。そして、この地が寺地に選ばれた理由を他に求めるべきとも考えられる。

岡寺創立の年もまた不明確である。史書では義渕が僧正に任ぜられた大宝三年（七〇三）に寺が造立されたとするが、この時はすでに草壁皇子薨後十四年を経過しており、皇子を寵愛した持統天皇もすでに崩じている。岡寺は草壁皇子の菩提を弔うために、持統天皇の意志が働いての寺と考えられるので、その造営時期の範囲はまず、皇子薨去の持統三年（六八九）四月以降で、義渕卒時の神亀五年（七二八）十月までの間である。そして持統天皇の草壁皇子に対する寵愛ぶりからすれば、天皇在世中に営まれたものと考えられる。[51] とすれば、造営の推定時期を、天皇崩御の大宝二年（七〇二）までに縮めることができよう。さらに、天皇の皇子に対する哀惜の念を思えば、寺建立発願の時期及びその造営工事は、皇子が薨じた直後に行われたのではなかろうか。

ところで岡寺で用いられた軒瓦と文様塼は、当時の他の寺々のものと比べると特異な感じを受ける。軒平瓦には葡萄唐草文が使われている。わが国では、葡萄唐草文は海獣葡萄鏡の文様として広く知られているが、瓦塼類ということでは、わが国よりもむしろ統一新羅期のものに多く見ることができる。その、葡萄唐草文を用いた軒平瓦の使用は、わが国においては山地、高台、山間、谷あい等に立地する一部の寺に限られており、それらの寺の規模はいずれもさほど大きなものではなく、いわゆる山岳仏教にもとづく寺院としての性格をもっているようである。[52] そして、岡寺出土と伝える特殊なものに文様塼がある。天人文の塼と、鳳凰文の塼が各一個ずつ知られるのみであるが、わが国では文様塼そのものがあまり普及しなかった。平城宮の緑釉塼、平城京の緑釉波文塼などが八世紀のものとして、太宰府の宝相華文塼が九世紀のものとして知られるが、七世紀代のものとしては川原寺の緑釉波文塼が知られる程度である。

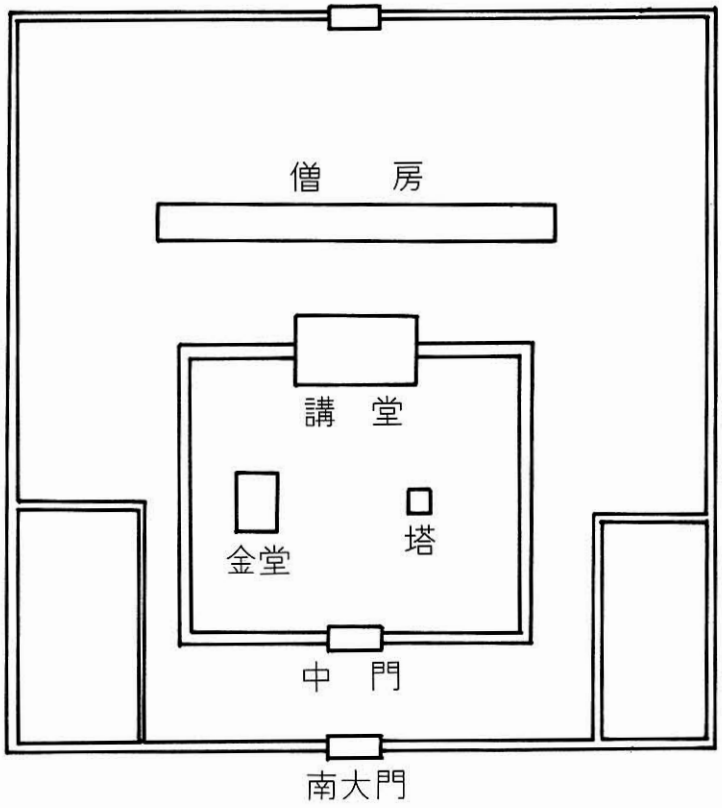
岡寺の塼は、平面が一辺約四十センチの正方形で瓦質である。文様は天人が天空から舞い降りて脆づいた様子を表わしたものと、鳳凰が瑞雲を呼びながら舞い降りた情景を表わしたものである。このような文様がレリーフ状に表わされた塼は敷塼ではなく、堂内で、

人の踏みこまないような、たとえば須弥壇の腰部などを飾っていたものと考えられる。[53]

このように、岡寺には寺の立地、用いられた瓦塼類に特殊な要素が見受けられる。すなわち、飛鳥地域中枢部に営まれた他の寺々とは異なった要素を具えた寺であり、比蘇寺や掃守寺などの丘陵地に営まれた寺々と歩を一にしたものといえよう。[54]それらの寺院は、在来仏教とは異なる要素、一面で神仙思想的な、さらには密教的な面ももっていたのである。

観世音寺　満誓と玄昉が造営に関わった観世音寺は、福岡県太宰府市観世音寺にあり、今に法灯を伝えている。観世音寺の伽藍配置や規模については、寺域内に残る礎石、福岡県教育委員会による発掘調査、『観世音寺資財帳』等によってある程度復原されている。回廊内には西に金堂、東に塔をおき、両者の中央北に講堂をおく。中門から発した回廊は講堂の両妻にとりついている。講堂の北には桁行十九間以上（六十メートル以上）にもおよぶ東西棟の僧房がおかれた。[55]また講堂の後方東西には経蔵と鐘楼があった。金堂は南北棟で、塔と向きあう形であり、仮りに講堂を中金堂に見たてると、中心伽藍は大和の川原寺と同じ配置になる。

観世音寺の創建については、『続紀』和銅二年（七〇九）二月の造営工事督促の記事によって、この寺が斉明天皇の冥福を祈願するために天智天皇が発願したものであることが知られ、[56]天智朝に工事が始められたものと考えられる。観世音寺に伝わる鐘は京都妙心寺の鐘と形態が酷似し、同じ頃に鋳造されたものと考えられている。そして、妙心寺の鐘には「戊戌年四月十三日」の銘がある。[57]戊戌年は文武二年（六九八）なので、観世音寺において造営工事がこの頃にも行われていたことが推察できる。ところが、四十年以上経過しても工事が完成しなかったために和銅二年の詔が出されたのである。この寺が七世紀後半に工事が始められたであろうことは、川原寺との同笵軒丸瓦が出土していることからも肯かれるのであるが、[58]どの程度進んでいたのかよくわからない。寺域内から出土する軒瓦は和銅二年を中心とした頃、すなわち八世紀のごく初め頃におくことができるものが主要なものとなっているので、おそらく工事が本格的に進められたのはこの時以降なのであろう。しかしながら『続紀』養老七年（七二三）二月には僧満誓が別当として派遣されている。満誓の

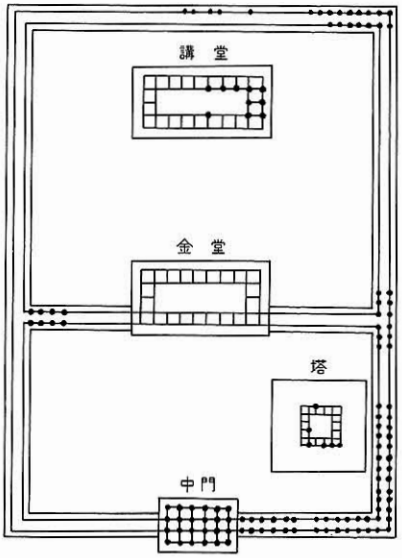


挿図２　観世音寺伽藍配置図　Ｓ１：2000

出家以前の経歴からすれば、彼が単に別当として観世音寺に派遣されたとは考えられない。霊亀・養老年間は、平城京内においても四大官寺の造営工事が進められている。朝廷は、畿内・畿外において官寺整備の推進に努めていた。遠の朝廷の官寺として重要な役割りを果たすべき寺の完成が遅れていたことによる満誓の起用だったのであろう。天平十七年（七四五）には、権勢を誇っていた玄昉を送ってこの寺の造営にあたらせているが、これは玄昉左遷の趣が強く、この時の造営は伽藍の修理といったところではなかったろうか。

大安寺　道慈が造営に関わった大安寺は奈良市大安寺町に在るが、残念ながら当時の建築物は遺存しない。しかし、当時大安寺が官寺として果たした役割は大きかった。大安寺は直接的には飛鳥の地から遷されたものであるが、その歴史は若干複雑である。すなわち『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』[59]（以下『資財帳』と略す）によれば、聖徳太子が病にかかった時、熊凝村の道場を大寺として営造して欲しいと望まれたことにあるという。しかし、そのことは推古朝には果たされず、舒明十一年（六三九）になって百済川の側に九重塔を建てることができ、これを百済大寺と呼んだ。その後天武二年（六七三）に百済の地から高市郡に移し高市大寺と号した。そして同六年九月には大官大寺と名を改めた。文武朝にも九重塔と金堂を建てたと記されているが、これは今、大官大寺跡と呼ばれている所に造営されたものである。こうした経緯をもつ大官大寺が平城の地に遷されたのである。

大安寺は霊亀二年（七一六）六月、飛鳥の地から平城京左京六条四坊から七条四坊にかけて十五町にわたる広い地に遷された。この年については若干史料に錯誤が見られるが、ほぼ確実視されている。もっとも、前身寺院である大官大寺が火災によって焼失したことが発掘調査によって確認されている。このことについては和銅四年（七一一）に焼亡したとの記事が『略記』[60]にあり、史料に見える記事を発掘調査によって裏付けることとなった。要するに、大安寺についてはすでに遷すべき堂塔はなかったのである。したがって『続紀』に記す「徙し建つ」というのは寺籍のみを遷したことを意味する。大官大寺跡、大安寺両寺院跡の発掘調査によって、その全貌がかなり明らかになっているが、両者の伽藍配置が全く異なっていたり、大安寺から大官大寺で用いられた瓦の出土量が僅かであることなどは、寺籍のみを遷したことを示すものといえよう。平城京での造営工事は、霊亀年間に直ちに始められたものと考えられ、発掘調査においては寺域内から奈良時代初期の軒瓦が出土する。また『資財帳』によれば養老六年（七二二）には元正天皇が供養具二十口、秘錦大潅頂一具を施入し、翌年には一切経を施入しているので、その造営工事はかなり捗っていたように思われる。しかし、寺域内から出土す

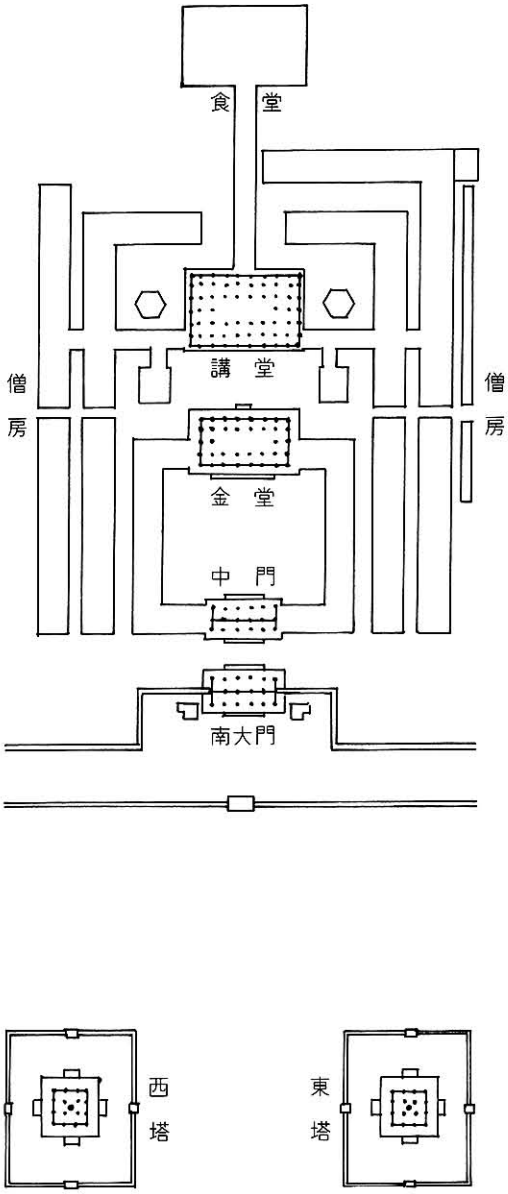


挿図３　大官大寺伽藍配置図
Ｓ１：3000

る奈良時代初期の瓦は少量なので、金堂のような中心的な堂宇の造営が進められていたことは確かであろうが、寺観が整ったというにはやや遠かったのでないかと思われる。

大安寺境内から大量に出土する軒瓦は、大安寺独特の文様をもつものであり、それらは天平年間に属するものである。それらはいわゆる大安寺式と呼ぶ軒瓦である。軒丸瓦は大小あり、ともに瓦当文様として鋸歯文縁珠文縁単弁十二弁蓮華文を飾る。軒平瓦も大小ある。大形品の一種(A)は一見牛頭状の中心飾りの左右に五回反転の唐草文を配する。他の一種(B)は先のものを模して作られたかのようである。小形品の一種(C)は大形品A種の文様をそのまま小形化したものと考えられるが、完全品がないので明確でない。小形品の他の一種(D)は、十字形中心飾りを上から囲む中心葉の左右に連続した三回反転の均整唐草文を配したものであるが、外区に楕円珠文をめぐらす。これらの軒平瓦はいずれも段顎である。したがって、奈良時代の軒平瓦の年代観からすれば天平末年以前に属することになる。軒丸瓦については、奈良時代の中では特異な文様構成をもっており、類例を見出しにくい。しかし、軒平瓦との関連からすれば軒丸瓦もまた天平末年以前におくべきものと考えられる。したがって瓦の年代観からすれば、大安寺において本格的な造営工事が行われたのは、遅くとも天平年間であったことが知られる。ということになれば、自ずから道慈の大安寺造営への関わりというものが浮び上がってくる。

道慈の大安寺造営に関して注目すべきは、「法師尤も工巧に妙にして構作形製皆其の規模を禀く。有る所の匠手歎服せざるなし」という『続紀』の記事である。では、大安寺において人々を感嘆させたところ、従来と異なる要素とは何であろうか。伽藍配置の面でみて



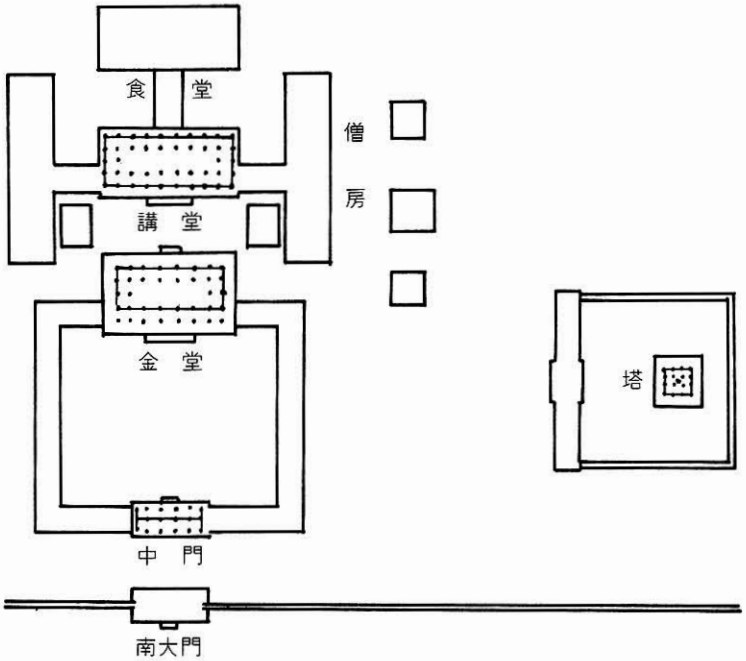
挿図4　大安寺伽藍配置図　S 1：3000

いくと、塔が金堂を中心とした地域から外れるという点である。従来の中心伽藍は、中門から発した回廊内に金堂と塔とが置かれるのが普通の形であった。ところが、大安寺では金堂を囲む回廊の外に塔が建てられた。要するに金堂院と塔院とに分けられているのである。しかも塔は双塔式である。双塔式伽藍はすでに薬師寺(本薬師寺)で営まれているので、全く新たな要素とは言えないが、むしろ塔が金堂院と別の地域に建てられたことが新規な要素であり、これ以後の伽藍配置に大きな影響を与えたということができる。

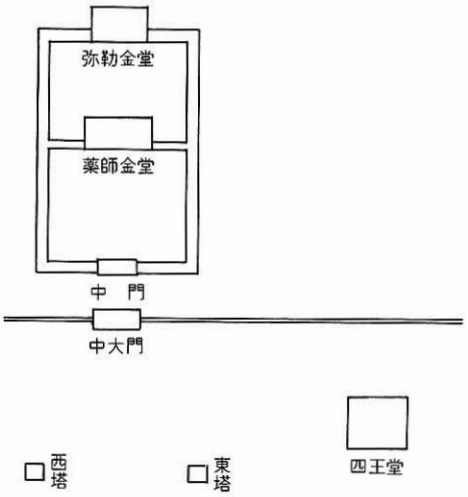
大安寺には遺存する堂塔がないので、その面から大安寺の特殊な要素は捉えにくい。しかし、建築史の面からは技術的に古式を示す薬師寺東塔にくらべ、東大寺法華堂、唐招提寺金堂、当麻寺東塔などには一段の発展が見られ、これはわが国での技術の開発によるものではなく、新たな技術が導入されたものであり、大安寺造営はこの交替期にあたるという見解が示されている。[61] こうした技術の導入に果した道慈の役割りにはきわめて大きなものがあった。また、右京に十五町もの広さを占める寺域のうち六条四坊七坪は『資財帳』に記す「池并岳」であり、今「杉山古墳」と呼ぶ前方後円墳がある。ここは本来「スミ山」と呼ぶ園地であり、これも道慈が新たに採用したものとの見解がある。[62]

唐招提寺　多くの困難を克服して来朝した鑑真が、天平宝字三年(七五九)八月に東大寺唐禅院から移り住んだのが唐招提寺である。寺は奈良市五条町にあり、金堂、講堂などの奈良時代の堂が今なお健在である。寺地は平城京右京五条二坊にあたり、四町を占めるが、その四至は諸説一致しない。なお、この地は天武天皇皇子、新田部親王の旧宅であった。

伽藍配置は南大門、中門、金堂、講堂、食堂が南北一直線に並び、中門から発した回廊が金堂の両妻にとりつく。塔は一町東に離れて一院を構成する。この寺の造営は、鑑真の戒院として出発したためか、この時代の寺が金堂から建て始められるのが通常の順序であるにもかかわらず、まず僧房が建てられた。そして食堂、講堂、金堂の順序で建立されていった。この寺が官寺として造営されなかったため、造営費用が十分でなく、いくつかの堂舎は官や貴族からの施入によった。僧房は新田部親王旧宅の房舎及び藤原清河家、食堂が



挿図5　唐招提寺伽藍配置図　S 1：2000



挿図6　西大寺伽藍配置概念図　S 1：4000

藤原仲麻呂家、講堂が平城宮朝集殿という工合であった。[63]

鑑真とともに来朝した如宝が造営に関わったのは金堂である。金堂の造営年代には天平宝字年間から弘仁年間までに四説[64]あるが、現在では鑑真入寂の天平宝字七年（七六三）以後であって、如宝の活躍期である宝亀年間であろうと考えられている。金堂で注目すべきは、前一間が吹放しであることで、天平建築の姿をそのままに見ることができる。また、堂の内部には華やかな彩色が残っており、横に飛ぶ飛天のほかに、上へ舞い上がるものがあったり、飛雲頭部の渦雲が小刻みな動きを示すことなど、全体に唐風が濃く認められることは、如法自身か、当時渡来した唐の工人の影響によるものと考えられている。[65]

西大寺　藤原仲麻呂が滅ぼされた天平宝字八年(七六四)、この戦いの時に孝謙上皇が戦勝を祈願して発願したのが西大寺である。寺は奈良市西大寺町に法灯を伝えているが、当時営まれた堂塔は全く遺存していない。寺地は右京一条三・四坊に三十一町を占める広大なものであった。これは東大寺に対抗する意図をもっていたからである。創建時の伽藍は、回廊に囲まれた中に薬師金堂と、弥勒金堂を南北においた金堂院、その南に東西両塔をもつ塔院、塔院の東においた四王院、これらが主要部であった。戦勝祈願を目的とした寺であったので、発願後直ちに工事が行われたのは四王堂であった。西大寺は薬師金堂と弥勒金堂という二金堂をもつ特殊な性格をもっていたが、薬師金堂の大棟両端には銅鐸をくわえた鳳形を立てた金銅製鴟尾をおき、棟上には二頭の獅子が支えた蓮華形の火焔付の茄形を置いている。[66]このように、大棟上に飾りをもつ建物は奈良時代までのわが国にその例がなく、きわめて中国色の濃いものであった。薬師金堂の造営は神護景雲三年（七六九）のことと考えられている。[67]東西両塔の造営に関わった、鑑真とともに来朝した思託が八角塔様を造ったのが神護景雲年間のことであるので、薬師金堂が中国的に造られたのも彼の影響かもしれない。西大寺の塔が、本来平面八角形で計画され、実施に移されたことは発掘調査で確認されているところである。[68]すなわち、東西両塔ともに八角形基壇の掘込地形によって工事が進められたことが明らかにされている。したがって、両塔はほゞ同時期に基壇の基礎工事が開始され、ある段階でこれが正方形に変更されたのである。変更の時期はおそらく称徳天皇崩御後の光仁朝のことと考えられ、この時、西大寺の造営計画は大きく変えられたものであろう。

室生寺　賢璟が造営したと伝える室生寺は興福寺別院として営まれたとも記録され、宝亀年間(七七〇～七八〇)以降で、賢璟が没した延暦十二年（七九三）までの間に創立の時期をおくことができる。[69]奈

良時代に丘陵地や山中に寺院が営まれることはあったが、この寺はまさに山岳寺院というにふさわしい。室生寺が営まれたこの地が、古くから竜王・竜神信仰の対象となっていたことによって、国家鎮護の意味をもこめて賢璟が造営を企てたのであろう。山岳寺院であるため、八世紀の諸寺院のような伽藍配置ではなく、山中に、地形に応じて堂塔が配置されている。それらの堂塔のうち、最初に建てられたのは五重塔である。現存する五重塔の中では最小で（総高十六・二メートル）、屋根は桧皮葺きである。様式的には天平時代にごく近接した時期のもの[70]とされており、賢璟が担当した可能性も指摘されている。金堂は塔の東南約百メートルほど離れて低い位置に在り、これは平安時代初期の建立と考えられている。その他の堂宇には密教的なものが見られるが、それは九世紀半ば頃から天台系の色彩の濃い寺に変質していったからである。

三　大安寺僧道慈

第二節において、造営技術僧のうち比較的具体的な内容のわかる何人かを選び、特記すべき点をぬき出してみた。また、第三節においては彼等が造営に関わった寺のいくつかをえらび、どのような特徴をもっているかを概観した。その両者が、すべてについて必ずしも結びつくわけではないが、多かれ少なかれ、彼等の技術が造営された建物に生かされ、その特徴が表われていることは確かである。と同時に、彼等造営技術僧たちが幅広い知識・技術を身につけていたことを改めて知らされた。

たとえば賢璟は室生寺と多度神宮寺三重塔の造営に関わっているので、造営技術はかなり高いものをもっていたであろうことが察せられるのであるが、注目すべきことは延暦十二年（七九三）正月、平安京造営に際して「地を相す」ために藤原小黒麿、紀古佐美とともに現地へ赴いていることである。「地を相す」ことは前の都、長岡京造営の際にも行われている。すなわち、長岡遷都に先立ってその地を選定するに際して、藤原種継、藤原小黒麿等が陰陽師を同道している。『続紀』延暦三年（七八四）五月十六日の記事には、陰陽助船連田口が伴われて「乙訓郡長岡村の地を相せしめ」とある。陰陽寮の規定の中には、「占い筮いて地を相る」ことが陰陽師の職掌として定められている。造営工事などに際して、地鎮めの儀法を執行したのである。陰陽師によってその地の吉い兆しを得ることを期待しているのである。延暦十二年正月に賢璟が伴われていることは何を意味するのであろうか。彼に陰陽道の心得があったのだろうか。平安京の造営は政府の事業であるから、当然のことながら地の吉凶を占うのであれば陰陽師を伴うべきであろう。賢璟の造営技術を平安京造営に役立てるべく伴ったのではなかろうか。ただ、この時は造営工事にそなえて地の相を占っている段階であるし、また、賢璟自身竜神信仰の地へ室生寺を建立したということからすれば、陰陽道を心得ていたことも十分考えられる。しかし一方では、京域の縄張り、すなわち条坊設定準備の意味合いもあったのではなかろうか。これに関しては『招提千歳伝記[72]』にも、賢璟に関して平安遷都の際にその鴻基を定めたとあることによってもうなづかれるのである。要するに賢璟は、単なる建築だけではなく、土木工事を含んだ広い意味での造営技術をもっていたと考えられるのである。そのような技術をどこで身につけたのか明確ではないが、鑑真その人をも含めて唐

招提寺と交りが深かった様子をうかがうことができるので、唐より渡来した僧たちからそうした技術を学びとったのではなかろうか。

賢璟のように技術の学び先を想定することができる者も居るが、行基や実忠のように目ざましい働きを残した者であっても、そうした技術をどこで得たのか定かでない者も居る。行基が最初の寺である家原寺を建てたのが慶雲元年(七〇四)で、三十四歳の年であった。以後、まさに超人的な活躍で、多くの寺を建て土木工事を興した。一方、実忠が関わった造営についての初見は天平宝字八年(七六四)に行なった西隆寺別院の工事である。この年、実忠は三十四歳であった。これ以前の彼についての記録は、天平宝字六年二月に上院務所の別当であったという程度であり、どのような経歴によって造営技術をもつに至ったのかわからない。神護景雲元年(七六七)に新薬師寺西野に塔を築いたことが知られるが、この塔は頭塔のことであろうと考えられている。頭塔は、行基に関係の深い大野寺土塔と同様、土で築いた塔であり、きわめて特殊な構築物である。そのことから、実忠についてはわが国にかつて見られなかった土塔を築く技術をもっていたということで、印度あたりからの渡来僧であろうと考えるむきもある。このように実忠については、その出自をはじめとする経歴が知られないのであるが、大仏背面の修理にも見られるように、きわめて特異な発想でこれを行なっている。このようなところからすれば、実忠が異国から渡来した僧である可能性も充分考えられるところである。

行基造営に関わるもののすべてが行基自ら手を下したものであるのかどうかわからないが、いずれにせよ、彼自身かなり高度な技術をもっていたことは確かであり、大勢の人々を指揮する能力にもたけていた。慶雲元年の家原寺建立以前については、飛鳥寺で学んだこと、山林修行に励んだことなどが知られる程度であるが、義渕を師とし、また道昭を師としたことが知られているので、そのような際に造営技術をも学ぶ機会があったのであろう。

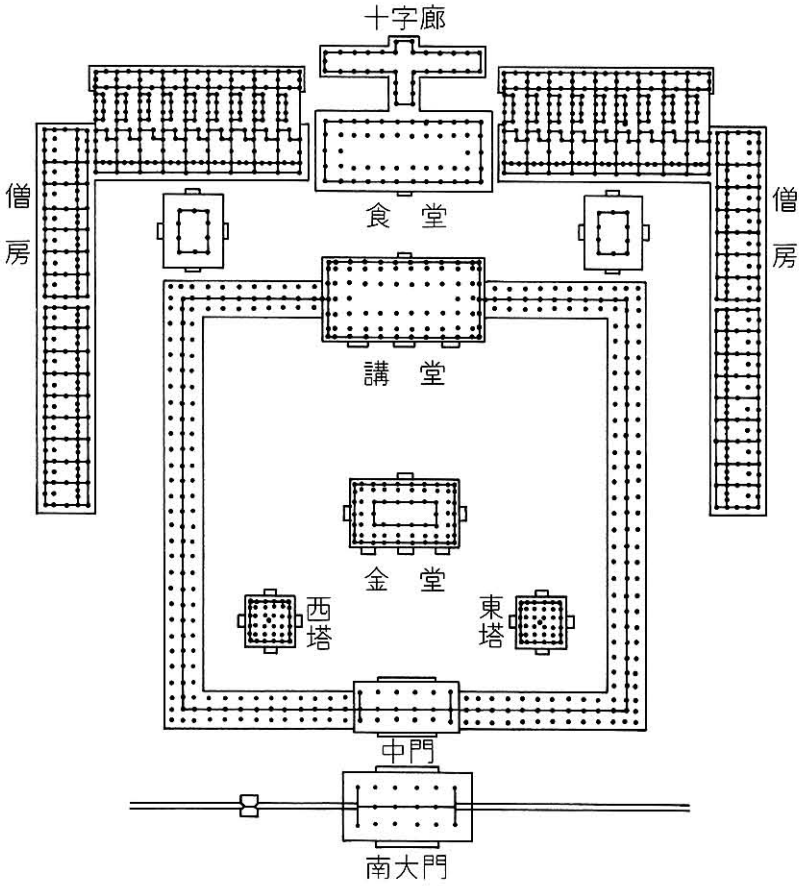
いずれにせよ、寺を中心とした当時の造営事業の中で目立つのが中国大陸、朝鮮半島の技術である。時代によって技術の導入先は異なるのであるが、当然のことながら飛鳥時代には百済や高句麗の要素が濃厚に認められる。斑鳩地域の建築遺構が、その造営年代が白鳳時代を中心とするものであるにもかかわらず、飛鳥様式で建てられ、その建築様式の中に朝鮮半島の要素が認められることは、寺院造営の初期の段階で朝鮮半島の技術を母体としていたからと考えられている。[73] 法起寺創立時に高麗学生とも伝えられる福亮が造営に関わっていることは、こうした一面を物語るものと言えよう。このような、朝鮮半島の影響を受けた寺院建築は、薬師寺にも認められる。双塔式伽藍配置は、わが国での仏教観の変化とともに、新羅からの導入と考えられるものであり、新羅の感恩寺に類似性を求めることができる。

一方、新たな要素として唐の影響を受けた寺院建築も次第に増えていく。七世紀後半からそうした堂宇が建てられ始めるのであるが、そのことが特に顕著に認められるのが天平時代の道慈による大安寺の造営である。

道慈は唐から帰朝後、程なくして大安寺の造営に関わることになる。その大安寺が、『略記』天平元年八月条にいうように唐の西明寺にそのままならったものであるのかどうかはわからないが、自らの唐での生活の場ともなった寺に範をとったものとなったであろうこ

とは容易に推察できる。寺の外観が他と異なるということは、軸部の構造も異なるということであり、『続紀』に「構作形成もみな彼より出で」というように、そうしたところにまで道慈自身が関わらねば完成されなかった新規のものだったのであろう。『続紀』の記事は造営技術についての道慈の真の姿を伝えているものと言えよう。

大安寺における新しい要素として、さきに東西両塔が回廊の外に出て一院を構成することを述べた。これが唐の影響であるかどうか

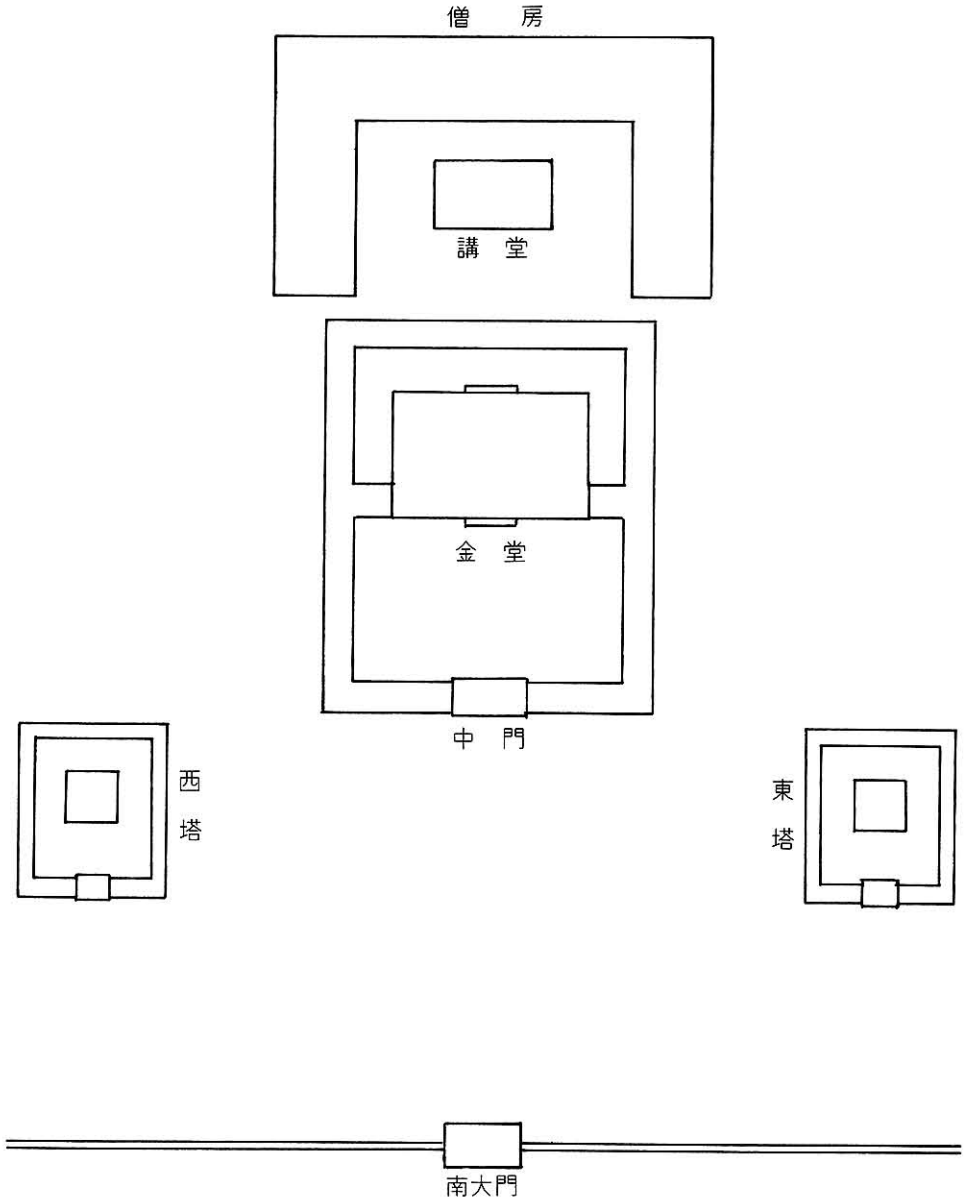


挿図７　薬師寺伽藍配置図　Ｓ１：2000

別として、彼が唐から招来したと考えられるものが寺域内から出土している。それは施釉の陶枕である。施釉製品は大安寺に限らず平城京内諸寺院、さらに平城宮や京内各所から出土するので、今や京域内から施釉製品が出土することに関してはさほどめずらしいことではなくなってしまったが、大安寺からは陶枕、それも唐製の陶枕が出土したのである。それらは、昭和四十一年に行なわれた大安寺講堂地域発掘調査の際に出土したものであり、[74] 唐製施釉陶器がわが国から出土することがきわめて稀であることからすれば、大安寺出土のそれらのもつ意義には大きなものがある。大安寺出土の陶枕には三彩釉交胎のものも含まれており、小形品である。それらの陶枕は唐では明器、すなわち墓に副葬品として納めるために作られたものである。そうしたものがなぜわが国にもたらされたのかわからないが、それらの陶枕を模した国産の施釉製品がともに出土しているので、何らかの実用品として使用する意図があったのだろう。いずれにせよ、唐代の製品が直接わが国にもたらされたことを示す重要な資料である。

このように、唐から直接もたらされたものがある一方、明らかに唐の影響を受けて作られたと考えられるものも見られるのである。それは軒丸瓦に見られる文様構成である。さきにふれたように、大安寺式軒丸瓦の文様構成は、当時のものとしては特異な構成なのである。その共通点を他にもとめると、遠く唐長安城出土資料にゆきあたるというのは強弁であろうか。もちろん細部まで共通しているわけではなく、長安城のものは外区が珠文のみであるという大きな相違点もある。しかし、蓮弁の状況は平城京内出土品には類例を求めにくく、長安城出土品に近い形態で表される。

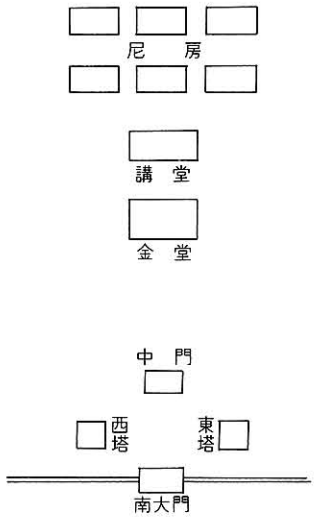
さて、道慈の造営になる大安寺に見られる新たな特徴のひとつが塔を一院として独立させたことにあると述べた。それでは、こうした伽藍配置は他に影響を与えたのであろうか。平城京及びその近辺で双塔式の寺を他にあげてみると、薬師寺、東大寺、法華寺、西大寺、秋篠寺、新薬師寺などがあり、都を離れると比蘇寺、毛原廃寺、当麻寺などがある。これらの中、塔を一院として独立させたもの、すなわち金堂院から離れて建てられたものとして確実な寺は、東大寺、法華寺、西大寺などであるが、秋篠寺もその可能性がある。これらの寺々は、いずれも大安寺より後に造営工事が開始されたものであり、鎮護国家の寺としての性格をもっている。大安寺はその創建時、百済大寺として建てられた時から天皇の寺であった。以来一貫してその性格をもっていたのであり、平城京へ遷された大安寺はまさに鎮護国家の寺にふさわしい寺観を整えるに至った。平城京での造営工事計画の当初から塔を独立させる意図があったかどうかわからず、金堂院には塔を置く余地があるとされている。[75] したがって、大安寺で塔院を南大門の外に設けるようになったのは道慈の考えにもとづくものとして良いのであろう。道慈の大安寺造営史料のうち、寛平七年（八九五）の『大安寺縁起』には、道慈の意志として「欲レ造二大寺一。偷図二取西明寺結構之体一」



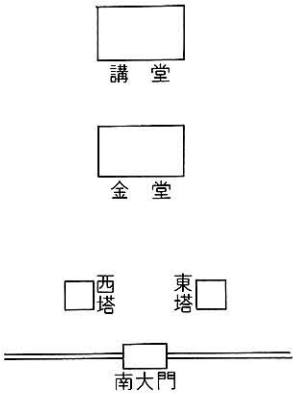
挿図８　東大寺伽藍配置概念図　Ｓ１：4000

とある。[76] 道慈の時代から百年以上経過した頃の史料であり、どの程度の真実を伝えているのか疑問がないわけではないが、唐で十数年学んで帰朝した道慈が、唐の代表的な寺である西明寺にならったと考えられたことは、意外に当を得ているのかもしれない。『弘法大師年譜』に見える「唐西明寺図」[77]に、回廊で囲まれた伽藍中枢部の外、わが国の伽藍配置で言えば南大門と中門の間に二基の七重塔を置いていることは興味ひかれることである。

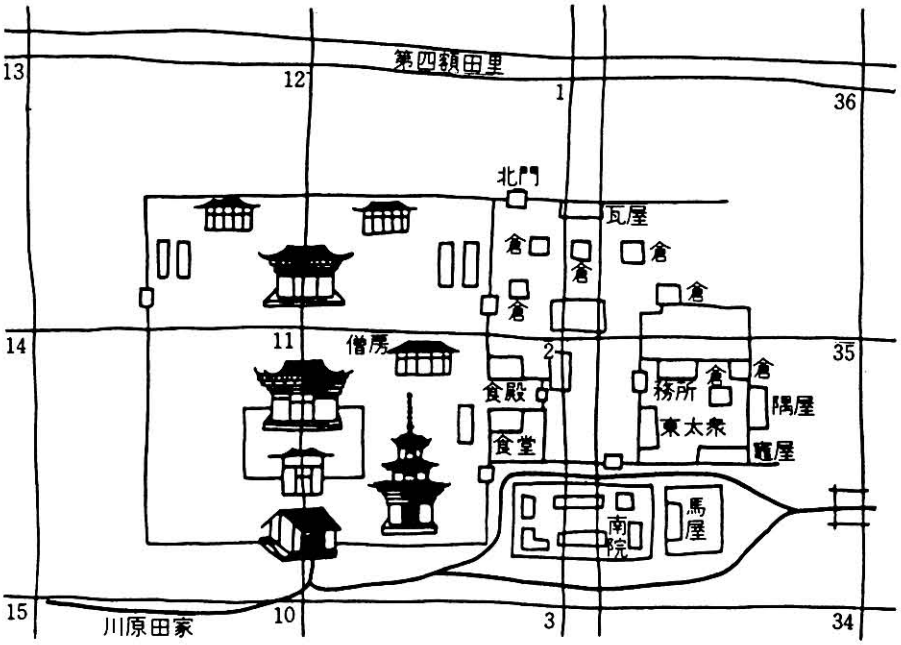
ここで想い起こされることは、奈良時代の額安寺の伽藍配置である。額安寺の縁起も不明なところが多く、当初の伽藍がどのような配置であったか分からない。もちろん、奈良時代の配置についても遺跡の上からは皆目分からないのであるが、「額安寺班田図」によって堂塔の配置を知ることができる。そこには、塔が金堂院から分離された姿で描かれている。この図が作られたのは奈良時代であり、描かれている堂塔の配置はこの図が作られた奈良時代の額安寺の姿



挿図 9　法華寺伽藍配置概念図



挿図10　秋篠寺伽藍配置概念図
S 1 ：2000



挿図11　額安寺班田図

である。本来、この図は田畑の所属を示すために作られたものであり、そこには、条里の区画が整然と表わされている。そして、そこに描かれた額安寺の伽藍が条里の区画にのっているので、この寺がこのような配置で営まれたのが条里施行以後であることが分かる。道慈の俗姓が額田氏であるので、この寺との何らかの関係をうかがうことができる。以上のような、伽藍の中枢部から塔を独立させたことは、律令政府の仏教政策の中で当時の新しい流れになったのではなかろうか。

七・八世紀における僧侶たちの知識量には驚くべきものがあった。小稿でとりあげた僧侶は何らかの形で造営事業に関係したと考えた者たちであるが、その中には、小稿のように一括した形では論じきれない者もいる。彼等の知識は、その属した時代により、また立場によって異なっていたが、いずれにせよ、それらの多くは朝鮮半島、中国大陸のものであり、彼等は時の政府の望むところを摂取し、その知識が国家の運営に活用され、律令国家形成に大きく寄与した。そして、八世紀には国家そのものが中国化していったこともあって、寺院建築には唐の影響が強く現われることとなった。たとえば西大寺において八角形の塔を建てようとし、実際に工事が始められたこと。中国では多角形の塔を建てることがしばしばあった。西大寺薬師金堂大棟の飾りもまた中国化の一端である。このような契機をつくったのは、道慈の帰朝によって始められた大安寺の造営であり、京内外のいくつかの寺に影響を与えている。そのことは伽藍配置によく表われている。塔が金堂院から独立した伽藍配置ということになると、国分寺の中にも見出すことができる。国分寺は「金光明四天王護国之寺」の名のとおり、まさに鎮護国家の寺であった。このようなところにも中国化という、画一化された一面を見ることができる。

〈註〉

1 『続紀』和銅七年三月丁酉条。
2 『続紀』大宝三年十月甲戌条。
3 竹内理三他編『日本古代人名辞典』第一巻〜第七巻　一九五八〜一九七七年。
4 「法起寺塔婆露盤銘」（『寧楽遺文』下　一九六二年）
5 前掲註4。
6 『書紀』大化元年八月庚子条に、狛大法師福亮と見え、恵雲等と共に十師に任ぜられている。
7 『略記』天武二年三月条に、呉学生福亮と見える。
8 『日本霊異記』上巻第十二に「高麗学生道登者云々」とある。（岩波書店『日本古典文学大系』70　一九六七年）
9 『書紀』白雉元年二月戊寅条。
10 「宇治橋碑」（『寧楽遺文』下　一九六二年）。『日本霊異記』上巻十二（岩波書店『日本古典文学大系』70　一九六七年）
11 『書紀』白雉四年五月壬戌条。
12 『書紀』崇峻天皇元年是歳条。
13 『日本三代実録』元慶元年十二月十六日条。
14 『続紀』「国史大系」本、「朝日」本はともに粟原としている。
15 『書紀』白雉四年五月壬戌条。
16 たとえば『略記』や『七大寺年表』など。
17 「行基年譜」（『続々群書類従』三　一九〇七年）
18 『続紀』天平十七年正月己卯条。
19 吉田靖雄『行基と律令国家』（吉川弘文館「古代史研究選書」一九八六年）
20 『続紀』養老五年五月戊午条。
21 『続紀』養老七年二月丁酉条。
22 「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」（『寧楽遺文』367　一九六二年）

23 「懐風藻」（『寧楽遺文』下926・927　一九六二年
24 「大安寺碑」（『寧楽遺文』下978・979　一九六二年）
25 『続記』天平十六年十月辛卯条。
26 「唐大和上東征伝」（『寧楽遺文』下906・907　一九六二年）
27 「延暦僧録」（「日本高僧伝要文抄」三『新訂増補国史大系』三一80）
28 「塔の階を減じ、寺の幢を仆して悪報を得る縁」（『日本霊異記』下巻三十六　岩波書店前掲註8）
29 浅野清・大岡実他「西大寺東西両塔」（『日本建築学会論文報告集』54号　一九五六年）
30 『日本後紀』弘仁六年正月己卯条。
31 慶宝については『大日本古文書』五—75・148・400、十六—111。正順については『大日本古文書』五—75。宝宣については『大日本古文書』五—75・147・360・400・401、十五—179・389・433、十六—210・215・227・247・249。
32 「東大寺権別当実忠二十九个条事」筒井英俊校訂（『東大寺要録』一九七一年）
33 前掲註32。
34 「多度神宮寺伽藍縁起資財帳」（『平安遺文』一11　一九六四年）
35 「濫觴抄」下　大内条（『群書類従』十六雑部　一九〇四年）
36 毛利久「室生寺の創建と金堂諸像」（『大和古寺大観』六　一九七六年）
37 とくに「構立堂塔」については、これを「構立宝塔」の誤りであろうとする考えがあった。しかし、塔は様式的に天武朝にはのぼり得ないので、天武朝に塔の工事が始まり、慶雲三年に完成したとの見解が示されている（町田甲一「法起寺の歴史」『大和古寺大観』一巻　一九七七年）
38 飛鳥寺の場合、崇峻三年（五九〇）十月に造営工事が始まり、塔心礎が安置され、仏舎利を納めたのが推古元年（五九三）であった。山田寺の場合には金堂の建立が皇極二年（六四三）、石川麻呂事件の後に造塔が計画され、塔心柱を立てたのが天武二年（六七三）であった。
39 石田茂作「法起寺の発掘」・中村春寿・稲垣晋也「法起寺の発掘成果」（『奈良県観光』48　一九六〇年）
40 奈良県文化財保存事務所『国宝法起寺三重塔修理工事報告書』一九七五年）
41 岡田英男「三重塔」（「法起寺・法輪寺・中宮寺」『大和古寺大観』一巻　一九七七年）
42 前掲註39。立木修「法起寺の調査」（『奈良国立文化財研究所年報』一九八一年）
43 奈良県『法起寺旧境内緊急発掘調査概要』一九六九年。
44 法隆寺若草伽藍と、西院伽藍の方位、滋賀県穴太廃寺の前身伽藍遺構と再建伽藍遺構の方位は大きく異なっている。
45 岡田英男前掲註41。
46 岡田英男前掲註41。
47 亀田博「埋もれた古代　発掘レポート・岡寺跡」（『明日香風』一九八二年）
48 『略記』大宝二年三月乙酉条。
49 「七大寺年表」（『大日本仏教全書』一一一）
50 『続紀』天平宝字二年八月戊申条。
51 上山春平『埋もれた巨像—国家論の試み—』一九七七年。
52 近江昌司「葡萄唐草文軒平瓦の研究」（『考古学雑誌』五五—四　一九七〇年）
53 森　郁夫「天人塼・鳳凰塼」（高井悌三郎先生喜寿記念論集『歴史学と考古学』一九八八年）
54 近江昌司前掲註52。
55 九州歴史資料館「第43次調査」（『大宰府史跡　昭和51年度発掘調査概報』一九七七年）
56 『続紀』和銅二年二月戊子条。
57 「妙心寺鐘銘」（『寧楽遺文』下965　一九六二年）
58 高倉洋彰「観世音寺」（『九州古瓦図録』一九八一年）
59 前掲註22。
60 『略記』和銅四年。
61 岡田英男「大安寺伽藍と建築」（大安寺『大安寺史・史料』一九八四年）
62 泉森　皎「大安寺周辺の古墳文化」（大安寺『大安寺史・史料』一九八四年）
63 「招提寺建立縁起」（「諸寺縁起集　護国寺本」藤田経世編『校刊美術史

料　寺院篇』上　一九七二年）

64　太田博太郎「唐招提寺の歴史」（「唐招提寺」一『奈良六大寺大観』十二　一九六九年）

65　井上正「金堂の文様」（「唐招提寺」前掲註64）

66　「西大寺資財流記帳」（『寧楽遺文』中395　一九六二年）

67　太田博太郎「西大寺の歴史」（「西大寺」全『奈良六大寺大観』十四　一九七三年）

68　浅野清・大岡実他註29。

69　毛利久前掲註36。

70　鈴木嘉吉「五重塔」（「室生寺」前掲注69）

71　「職員令　中務省　陰陽寮」（「令集解」『新訂増補国史大系』二三73）

72　「招提千歳伝記」巻中一（『大日本仏教全書』105　一九一五年）

73　岡田英男前掲註41。

74　八賀晋「大安寺発掘調査概要」（『奈良国立文化財研究所年報』一九六七年）

75　太田博太郎「大安寺の歴史」（「大安寺他」『大和古寺大観』三巻　一九七七年）

76　「大安寺縁起」（「諸寺縁起集　醍醐寺本」藤田経世編『校刊美術史料寺院篇』上85　一九七二年）

77　「弘法大師年譜巻三上」（『真言宗全書』三八　一九三五年）

挿図のうち法起寺・大官大寺・大安寺・唐招提寺・西大寺・薬師寺・東大寺の伽藍配置関係及び額安寺班田図は、宮本長二郎「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」（集英社刊「日本古寺美術全集」第二巻『法隆寺と斑鳩の古寺』一九七九年）に拠った。